

としてゐる様では餘りになげかしい。下手でもよい、一畫をさら／＼と書き、一詩を吟する様な心にゆとりがほしい。

四、金と色

日々の新聞の三面記事を賑やかにしてゐるのは大抵これに絡るものが多い。これ等の出来事を人間の本能の作用だからと平氣で言つてゐる者があるとすれば、その人はまだ人間の仲間入は出来ない、憐れむべき人だ。我等は金と色とのために人格を投げ出したくない。

五、師弟の關係

教師はたゞ學問の切り賣をする者でもなければ蓄音機のレコードでもない、先生といふものはそんなちつぽけな者じやない、人格の陶冶者である、換言すれば親であるべきだ、何の理屈もない。生徒は自己の心を師の前に晒け出して教を乞ひ心をみがくがよい、悪心を密閉してそれにメツキをしても駄目だ、つまり兩者の心と心とが涙の出る様なあたゝかさで融合し結合する所まで行かねば嘘だ。

六、青　　年

青年は元氣がなければ駄目だ、何も蚤の尻を八割にした様な事をくよく／＼思ふな、泣くのもいい、腹を抱へて笑ふのも

して新しい學期に臨んだ。

今より之を読みかへして見れば、自分の拙い筆でさへも部の趣山水の風致、並びに之に接し得た自分の幸福が限り無く胸中に湧き出る。まして之を達筆の力をかりて表せば、吾々は悉く自然に包まれて少しも人事にふれしめられないだらう愉快な事は無論多かつた。悲しみも比較的あつた、併し原稿には收めずに其の場の憂として過して置いた。だが何と云つても自分の頭に深く刻まれた事は藝術の力の尊さ殊に筆の力文の力の偉大な事であつた。

自分が夏休みの創作として書きつらねた事も之が爲で何か末の思出になる事だらうと思つたからである。成程書いた時にはさほどでも無かつたが、今更開いて見ると過ぎた休みを再得した様な思がする。之も拙いながら自分の筆の力と知つた。

八月廿九日「蟬の聲」こえだになく、凄風棕櫚の葉を鳴らして、豪雨忽ち至るかと思へば秋陽さつと黒雲を破り、心なぐ外に出づれば、盲目に等しき余が眼の將來が偲ばれて凄切の思胸に迫る。這入つて書を読めば心打ちとけ慰安を思ひ誠に藝術の力の重且大なるを痛切に感ず」と書いてある。之も

よい、何でもよいから元氣でやることだ。

七、宗　　教

成年になつても宗教に心を止めない様な者は、いくら學者でも人格の何處かに缺陷がある。それ故其の人と相對する時何だか淺薄な氣がする。心にあたゝかさがないから、懐しい様な感じも起らない。要するに宗教は老爺や老嫗のみの傾聽するものだと思つて居るやうではまだ修養が足りない。

暑中休暇の一日

川　島　吉　之　助

青田を渡る風は涼しい。湖岸に訪れる波は大湖のさゝやきである。明月も夜美しく、晝は青葉が茂り合つて、到る處翠光に満ちて居る。蟬の聲もこぼれる如くに夜は長月を偲ばせて虫の音は數々の音楽を一時に聞く様である。

自然の美を味ふに何不足ない、此の我が生れ故郷の趣殊に美しき晩夏初秋而も中學時代としての最後の夏休暇自分は日々の快事をもれなく原稿に收めて、晩夏初秋八月の田舎と題

藝術の値文の力の尊さによつて書いたのであらう。

休中は何時も夕方湯を浴びて肌新しく改め書齋から若葉の外を眺めた。何か讀んで見ようと思ふ時には、必ず國漢の書物を取り出して習つた俳句俳文等を讀んで見る。

「菊は東籬に榮え竹は東窓の君となる。牡丹は紅白の是非ありて……」何と云はうか全く綠樹の中にとけ込む様な思がした。

文學の力は貴い。筆の力はするどい。科學の本が手前にあつても、箱の底から塵だらけの國語の書物を出してずつと以前の「千里が春」を讀んだ事もあつた。

休暇中に得た自分の所見の中藝術の尊いことを最も深く感じた事と思ふ。

(完)

野　　分

川　澄　健　一

野分は實に男性的です。

さあつとすべてを、草木木々も、覆ひかぶせる様な力強さ

を以て吹き来つて、また吹き去つてしまふから。

木々が紅葉し初める頃から、何となく冷たい、厭なもの
が吹いて、青桐の褐色になつた葉を、一葉又一葉、靜かに散
り落すことを手始めに、弱い落葉樹の葉を皆たゞき落して骨
ばかりにする。昨日まで恰好のよかつたポプラが、今日はも
う葉の様になつてしまふ。秋も深くなつたんです。

一面の茶褐色にさびれ切つた近江盆地に立つて北を見ると
冬枯れの景色は遠く連續して、遙か彼方に白雪を戴く伊吹連
山が見えます。私が登校の途中苦しんだのは、あの連山から
吹き下して来る寒い伊吹風でした。今卒業期になつては、伊
吹風をまともに受けて、汽車におくれかゝりながらマントに
身をくるめて、一本の畦道を走つた事などが一層なつかしく
感ぜられます。木立が悲鳴をあげようとも、寒さに震へよう
とも容赦なく、あらゆるものを征服しようとか一杯に近江盆
地を傍目も振らず吹きまくります。

冬がよく晴れた日に、學校の廣い運動場で教練や、体操を
やつてゐる時も野分は無遠慮に訪れます。さつと一陣の烈風
が吹く度に、黄色を増し切つた銀杏樹はさびしく散つて地上
を走ります。又砂が全部舞ひ上つて、濛々と煙り、その壯觀

さは一寸言ひ表はせない位です。その砂煙の立つ中に、私達
は「右むけ右、左むけ左」を五ヶ年間やつたのです、その時
こそ、私達赤鬼健児は意氣高く、勇ましく奮闘しました。

野分は實際私達の血を湧き立たせます。

都會！

夏原 幸一

此の靜かな平和に満ちた田舎に住み、淡き哀愁を胸におぼ
ゆる様な月夜!! 毎日蟬の鳴聲と、青々と成育せる稻又緑樹に
包まれた山山の景色に接して許り居た田舎者の俺が、大阪驛
のブラット・ホームより多くの人々と共に市街にはき出され
た時、もう其處に展開された全ての物は今迄見なされた俺の
頭の思でと餘りにもかけ離れてゐた。嘆聲と共に只一語違ふ
なあ……やつぱり「違ふわい」と思ふ許り……。少
時俺の頭には此の大都會の活動の光景が走馬燈の如く行き、
した。彦根は死せる町!! 大阪驛前に釘付けされた様に立ち盡
くして、故郷の景色と、此の今眼前に展開されてゐる全ての

……それはほんの少しの間に馬鹿の頭をぐるぐる廻つて、瞬
間に消えた夢であり幻であつた。

闇は増し行く

夏原 幸一

温かな本當に氣持のいい夜だ。

今俺は一本橋の上に腰掛けて、美しい水の面を見つめてゐ
る。澄み切つた月ではなかつた。朧にかすんだ秋の月、昨夜
は牙え切つてゐた。冷たい氣配の満ち満ちた満月の夜であつ
た。此の一本橋、何か原始的な、ロマンティックな、妙に心
を浮き立たせる橋だ。小さな橋の上に腰かけて、友と二人で
仲よく並んでゐた。晴れやかな眺めだ。廣々とした胸一パイ
大きく美しい空氣を吸つては又ブツと吹き出したくなる様な
胸に暖かく感ずる月夜!! 芹川の上流で、堤には大きい木もな
く、すゝきや小木が露を受けて、しつとりと月の光を吸つて
輝いてゐる。すぐ向ふの草叢から忍び泣くやうなこぼろぎの
音が聞えてくる。

肉強食、多くの鬭争を孕んだ大都會に於て活動したいなあ……
……と一寸都會に憧れる様な心持ち起る、又一方にはあんな
靜かな大自然の恵を満身に浴び、豊かな情緒漲る美くしい
月夜……。頭の中は舞臺が變る様に、思ひはかけずり
廻る。前方に青く又赤く誘惑と魅力を一ぱいに湛へた様なカ
フェーの光り、俺は大都會の華やかな憧れの空想と幻影とを
抱いてやつて来た大阪にと着いたのだ。圓タクの輕やかなス
ピードで、セメントで疊まれた道路を走り去るのも誘惑だ、輕
快に走り去る圓タクを見ても、小さな心を傷つけられるプロ
の悲しみ!! 反抗の心!! 併しなあ、こんなプロや仕様がない。
い。あの電車に乗つても叔母さんをビツクリさしてやらう。

「お、い、月だね、温かい夜ぢやないかい。こんない、橋の上で涼んでたらい、だらう。廣々としてゐるね、周圍が。」
「うん、い、月だ。惱ましいやうな夜だ……」。友がないから駄目だ。夏は何時も此處で只一人で涼んでゐるのだ。」

「こんな所で一人涼んでゐたら、どうかなつてしまふだらう。月夜の風を引くかも知れないぜ。」一人はかなはん、話相手がないで……。「うん、い、い。」少時無言になつて、又水面に見入つた。月光を受けてさら／＼と靜かに流るゝ清水は銀色に輝いてゐる。何といふ美しさだらう。僕は夢の國をさすらふ如くボンヤリと見つめてゐた。無言になると微かな物音まで耳に入つて何か淋しい様な氣もする。矢張り秋だと思ふ。ふと顔を上げて前方を見ると、鈴鹿の山々が明るい空にくつきりと浮んでゐる様に連なつてゐる。

突然お寺の方からどつと笑聲が起つてくる。もう芝居が始まつて居るのだな。「おい！もう歸らう。」友は無言で立ち上つた。僕はもつと其處にゐたい様な氣もした。そしてもう一度銀色の水をジツと見つめて靜かに立ち上つた。

嵐の前の靜けさ？重苦しい沈黙に包まれた群集は、クライマックスに達した舞臺を見つめて、少時呼吸を潜ませてゐた。

突然誰かが「うまいぞ——」とどなつた。沈黙は一度に破れ、四方から起る拍手はすべての靜けさを破つた。それもほんの一時적であつた。又すべては靜けさに沈黙に——星は美しくまたたいてゐる。

何か胸に込み上げて来るものを僕は感じた。

五年間の隨感

夏川孝太郎

私が小學六年生になつた時、上級生の中學入學の成績や如何にと、自轉車で中學校へかけつけたものだ。そして先輩の好成績を羨むと共に、自分が同じ西學校生徒だといふ事を喜んだ。

一年後に同じ運命が自分にやつて來て、入學の喜びは私の心持ちを完全に明らかにした。此時ばかりは他人のいひつけを喜んでよく聞いた。不思議な程！

明らかな氣持ちに壓倒されて、外の感情を挟む餘地がなくなつたからだらう。

萬象は春の陽炎にとけてゐる、私はその中を自由に感激して飛び廻つた、入學の當座は嬉しい好奇心で溢れてゐた。新しく買つていたゝいた机の位置を色々かへたり、花瓶を立てたり、ニユウの帽子の白線に名前を書いたり、姉から譲つて貰つた解剖器をひねくつていたり、夏休みになれば素裸で湖にとびこんだり、すべて明らかな春の日の様な印象で充實してゐる。不思議に當時の思ひ出は晴れた白許りである。

二年生に進級するとクラスメートの性格が骨立つてきて、未熟な自分の感情は氣押され勝ちだつた。

一二年時代は先生を尊敬し、上級生を崇拜し慕ふ念が盛んだつたが、しかし今は年齢を問はず學年如何で平等だ。當時の上級生と今の我等上級生とを比較するに、前者は蠻からだが、後者はスマートであり、又前者は紅顔で後者は白面である様な氣がする。

三年生當時にはなんだか紅い火の様な印象がある。

さう思へば寒稽古の時、闇に眞紅に熱する炭火にだまつて下向きにあたりながら、私がつく／＼眺めた奥村さんや寛さんの眞赤に照らされた顔が目につく。

それから、學校手帳をいたゞく日に夕陽に染められて、渡

米する親友と手を握りあつた事、どてらをきこんで兄の様な親しみを感ずる鳥生新生先生に會つた晩等すべてこれ火だ。友の中には早や此時に感傷にひたつてゐた者もあつた。彼等が十五六の時に味つたのはそれは本當ではなかつたらうあの風に散る櫻の下で知つた胸の痛みは、それは月の精が地上に降りる晩には、若いものが誰も感じる若き生命の甘さだ。それは感傷的な若人の胸にある官能の錯覺にすぎない。しかしさういふ涙ぐましい様な心持ちがあればどれだけ幸福だらう事が現實的でないから。

學科が複雑になると同時に感情も複雑になる、これが三年生だ。かういふ中學生時代特有の心の裏面が、四五年を通じてひつ／＼いた影になつてゐる。

さて四年生になつた。今更の様に奮闘に蘇へつた。

十字軍の悍馬が青草萌ゆる丘をまつしぐらにかけ上るやうに、將來の名譽と熱情とを目覺して一時の禪生活に没入する時代だ。この間に我等のぐらつた意思も確定した。皆は眞劍だつた。

五年生になつてしまつた。こゝに特筆すべきは御親閱の時の感激である。高鳴る胸のほとばしりもて若き 聖天子を眼

前に拜す、何たる光榮ぞや。

友人間の直接の交渉は後一年だと思へば皆懐しく、私は友と靈仙にも登つた陳屋山をまきはめた。そして最後の印象を深くする爲にあらゆる刺戟をあつた。しかし最も熾烈な感情はこれをいひあらはせない。對八商野球戦に惜敗して泣いたのは昨日の様だ。

豫期した如く今や、卒業寫眞、將來の志望といふ中學卒業後の感情をおしつけられる不愉快さが起り、到頭中學生の冬もやつてきたなあといふ感を深くする。

これを書いてゐる間に裏寺の御詠歌にあはす鐘の音が、寒念佛さんの鐘のひびきの如く耳に入る。憂鬱な曇り日である。もう後四十日、實に特急列車の様な中學生生活だつた。

思ふ！ なつかしの潑刺たる中學生時代よ

A youth is a crystal of purity.

ぢきに別れる運命にある友よ、またあふ日までまたあふ日迄。

或る夜に

末松修

二三日鬱陶しく降り續いた雨も昨日から漸くあがつたが空は夜に入ると共に險惡になり、一面に覆はれた黒雲の所々に白い部分が晝の名残りに取残されて居る。

十月の初にしては少し寒い風が未だ單衣でゐる自分にはとても寒く感ぜられた。

今にも雨が又見舞さうなので常のやうに人通ひもなく、高下駄の音がいに高く響く。

突然號外の鈴の音が十二丁目の込み入つた家の間から響いた。四辻に來た時には號外屋は目の前に來て居た。反射的に「一枚下さい」なと云つた。

横の家に今號外を投込んだ彼は脇の一枚をとつて近寄つた其の時「ようッ」と號外屋は云つて、暗い街燈の下で白い齒だけが少しく光つた。

N君だ!! 體の恰好立つて居る具合、夜目にもはつきりN君

であることが分つた。「やつ君か。」と大きな聲で叫んだ時、彼は再び白い齒を見せた。

N君!! 野球選手のN君!!! 晝間は選手として日の暮れるまで、あれ程身を使つて居ながら、今又此の風采とは! 今もらつた號外も見ずに彼をつくぐと見た。えらいもんだくとわけもなく思つた。

同時に袂に手を入れて一方の手で之を請求した自分が恥しくなつた。「君はえらいや選手をしてゐてこんな」と云ふともなしに云つた時「なーに遊んで居ても仕方がないからね」此の一言彼にあらずして……意志の強い負けず魂のN君だけの詞だと思つた。

×

今まで自分の爲すべきことを、意志弱くも等閑にして澄して居た自分には、彼の詞は彼の風采はそれ等のうつる鏡を見せつけられた様に思はれた。

高校を志望と柄にもない大きな望を抱きながらも、一時的の娛樂にこれではならぬと思ひながらも、誘惑に一步步と引きずられて、今日明日と爲すべき勉強をおこたりかちであつた自分にとつて、今のN君の一言は正に晴天霹靂である。

N君も野球以外に、又號外配りの外に、楽しい娛樂もあらう。併し今、目の前の姿は強い誘惑に打ち勝つて、自己の任を果さんとするN君の強い意志の姿である。

×

此の様な事を想つて讀まうとして讀み得なかつた號外を見れば「官吏の減俸だ。」「えらいことだね、併し僕等にはまあ關係はないさ。」「お、併し此邊はやられるんだぜ。」とN君は頗でS先生の内を示した。

自分の情心を目覺してくれた人ともつと何か話したかつたけれど彼は今公の人心ならずも「では然様なら頑張つてくれ給へ」「サンキュー」彼の輕快な黒い影は見る間に次の町の黒暗の中に消されてしまつて、只腰の音が方向を告げて居た。

×

強い決心を心に呼び起しながら、足をはやめて家に走つた。頑張るんだ。それは今彼N君が教へてくれた暗示ではなからうか。

誘惑に負けるな、自己の意志を強く持て、

刻々の勝利が最後の勝利を作る。

自己に克て、今勝つ者が永久に勝つ。

N君の先刻の姿は此の様な金言銘句となつて表はれたのだ
否N君が自分に與へてくれたのだ。

×

現在の吾々はあまりに成績點數向上のみに汲々としてゐる
ではないか、點數の多い者が人に重んぜられ、點數の少ない者
が人々から輕んぜられる。

然らば學生の生命は點數のみか？

五年間考へても／＼も満足な解決を與へてくれなかつた問
題だ。勉強のみにたづさはつての五十點と、他に有益な事に
従事して眞からの五十點とは、いづれが長か、いづれが否？
……解けた／＼今解けた！！

曰く實力に在る。之だ、之だ、來るべき實社會奉仕の如何
に在るんだ。

陽 春

眞 野 寂 順

雲雀の囀りにのび／＼した野にも山にも、勇躍進出の力が

足もとにばさり／＼と打寄せる波の音も松の並木を吹き渡
る風も、夕陽を孕んで走る船の櫓の音も、漁夫欸乃の相答へ
る聲も凡ての音聲が自然の音樂であるかの様に聞え、恰かも
仙境にさまようてゐる様な心地がする。嗚呼、私はいつまで
も自然を愛する。

秋 雨

秋雨の音、靜かにして、色めきたる木の葉を打つこそをか
しけれ。今宵も月見んと樂しみ居たるに、雨いぢわるくも降
りいでて書齋にとちこもりて電燈の下にて書を讀むに一匹の
蠅飛び來りて、燈の周圍を飛び障子にあたりたる音など、物
憂げに聞ゆ。

雨に風さへ加はりて恰も落葉の地をたゞく音に似たり。や
う／＼夜寒になるほどに、雁がね鳴きて秋も深きを知る。う
つ／＼と眠を催す程に、雨やうやう、小やみになりて雨だれ
の軒下の砂うつ音こそいとあはれなり。床に入る頃雨やがて
やみたるやうなれば雨戸をあけ外を見るに月さへわたり、西
の風や／＼よく、ふき來りて寒さおぼゆれば戸を閉ぢ家に入
れり。

みなぎる。たけなはの春である。卯月の太陽の下に靜かな海
の面がきら／＼とまぶしく光つてゐる。四方の山々は夢見る
やうな物柔かな色をしてうつとりと煙つて見える。頂にはま
だ雪を頂いつた秀麗な伊吹の姿が明るい日に輝きながらすつ
きりとそびえてゐる。

東西江湖の切れ目のあたりに奥の島半島が一抹の淡墨でも
刷いた様にぼつかりと浮んで見える。曇り勝ちな春には珍ら
しくよく晴れて、少しも塵埃を交へない湖上の空氣はどこま
でも澄み透つてゐる。

春 の 濱

私は今濱邊にぼんやりと立つてゐる。西山の裾は霞に包ま
れ水平線すら薄ぼんやりとしてゐる。逆光を受けて湖面に雄
々しい影を寫してゐる伊吹の山は、何と云ふ靜寂なそして何
といふ莊嚴な姿であらう。

玲瓏たる一輪の陽は既に比良山の彼方に傾いて鈍い光を放
つてゐる。私は薄どんよりとした空に安土の城址、湖上に突
出た奥の島半島、そして湖上の金波の中に淋しく浮んでゐる
沖の島、白石、多景島等の自然の靜かな公園を眺めてゐる。

ごりごめのないこい

木 村 三 雄

天氣のよい日、やつと昨日までの大雨がやんだので道はぬ
かるみでどろ／＼である。馬車が一臺過ぎた。ぬかるみに落
込んでどうしても動かない。馬は筋肉をはりきつて汗を出し
たてがみを躍らして頑張つてゐる。もすこし。とその男は後
へまはつて後からうん／＼おした。やつと出て馬は元氣よく
進んで行く。僕は馬車ひきが馬をたゞく事をしないで後へま
はつた事がむしろ嬉しかつた。馬ひき人夫は往々自分の
力で一寸助ければすむ場合でも、さうすることなしにいたづ
らに馬を冷酷にもしかりつけ且なぐりつけるものである。

×

私は床屋で頭をかりながら隣に煙草を吹かして得意さうに
話をしてゐる土木請負業らしい男の話を聞いた。

「個人、個人のうけ負は將來の信用にも係はるから堅固に、眞
面目にし上げねばならぬが、驛だとか、官營工場の家屋等は

縣の仕事だからいゝかげんにして置いても大丈夫だ」といつて私にはわかりさうもない用語をつかつて話してゐた。しかし大体の所セメント工事の事らしい。なんでも基礎工事に用ひる材料をへらしてごまかしたらしい。するとそばの男が「なるほどそれやごもつともだ、うけ負などはもうける時にやもうけなきやね」

私は嫌になつてしまつた。亡國者がこゝにも二人ゐるなと

×

十二三の人の文章が私は一番好きである。

十七八になると文章に緩はできるが、文句は上手だが、大抵内容はからつぽである。空虚である。センチメンタルだ。生意氣だ。まるで私の様に。

中學の一二年生の文など大變いゝのがある。純でかざり氣がなく、胸がすく様です。いつまでも純な心を失はない事ですね。

一寸待て

福田 杲 正

「一寸待て」此の一語は吾等が世渡の上に最も大切な言葉である。つまり反省と同じ意であらう。

何事か始めるに際して、感情のはしるがまゝに放任しておいたならば、必ず悔恨と云ふ二字がくつついてくるであらう。

喧嘩の時の「一寸待て」は、何氣なく聞くものには意氣地のない卑劣な言葉の様に思はれるでせう。けれどもその人は今私が考へて見るに、たしかに修養の足らぬ人でありませう。私の小學五年生の頃と覺えてゐるが、或事によつて口論し遂に喧嘩をした事がある。相手は中々強い奴であつたが、私もまけはしないと心でりきみかへつてゐた。併しだん／＼激しくなり、殴り合ふようになつた。しばらく戦つてゐる處を折あしく當番の先生に見つけられ大いに叱られた。その時私は考へた。「その時一寸待て」と言つて考へ直し打ち合ひをしな

ければよかつたのにと……。

成程、若し私が「一寸待て」の一言を用意して居たならば輕卒な眞似はしなかつたらう。投書家にしろ畫家にしろ政治家、宗教家にしろつまらぬ事を生まぬであらう。

若し考へ判じて事を爲したら、それは即ち「一寸待て」を行つた人である。つまり「一寸待て」の一語は吾人の思慮分別を與へるものである。

思慮分別してその事に當つた結果は、中途で意志のぐらつくやうな事はなく、後悔する事がない。吾等はすべてさうしたいものである。併し中々かういふ場合には行かず、俗にいふ「行き當りばつたり」と云ふ事に成り勝ちである。その儘にして置くのは宜しくない。故に「一寸待て」の一語に基いて事を爲すべきである。

菊

菊といへば何だか心が透き通る様な氣がする。それもその筈だ。あの園に於ける肥立ちを見よ。如何にも尊さが漲つてゐるではないか。又恐れ多くも菊は吾が皇室の御紋章に用ひられてゐるのである。

畏くも 皇室の御紋章は 皇室を中心に吾が國民が一致團

結してつかへ奉つてゐるといふ意が含まれてゐるのださうだ彼の忠臣無比とも云ふべき楠公父子を思ひ出すと直ぐ菊水を聯想する。吾が家の前の菊畑には、白菊、黄菊、殆んどあらゆる菊が父母の手によつて立派に蕾をつけてゐる。又道端の草の中に咲き匂うてゐる野菊の愛らしさ。

やがて霜が降つて雪をみる頃までも菊はけ高い操を示してゐる。

初秋雜感

辻 三 雄

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞ驚かれぬる

全く其の通りだ。夏休みの漸く終らうとする頃は、厳しい残暑の中にも、初秋の風が、颯々と吹き渡る。そして學校の授業が開始されると、爽氣満々の九月の教室は夏休みを控へたころの教室と、雲泥の相違があるのに氣がつく。

チロロ／＼と秋虫が鳴き始める頃、野路を歩けば、活動的な、衝動的な夏の色は次第に消えてしまつて、奥床しい落着いた景色に變つてゐる。自然の一樣性は遺憾なく發揮されてゐる。草花に於ても秋草は濃艶な春草に較べて、桔梗と云ひ野菊と云ひ、女郎花と云ひ、凡て可憐な乙女のように、よわよわしい哀憐の情を起させるものが多い。

又、果てしない碧空それは實に秋だけに許された空の色である。

秋は正に天地に迫つてゐる。此等の四方の景色を眺めると透徹した秋の心は、ぐん／＼僕の腔腹に込み込んできて遂に澄み切つた或る物が、体内に充滿してゐるのを覺える。僕等の心を惹きつける秋は來た。そして廣闊な秋の景色は愈ゝ其の深刻さを増してゆく。

或る傳説

大 照 敏

江州犬上郡磯田村字八坂といふ村に、有名なといつても知

とにした。

當時の裁判所は今の彦根の裁判所では勿論なかつた矢張り

佐和山に裁判所があつた。

そこで助作は毎日々々五里餘りの道を八坂の土地を経て佐和山裁判所へ出頭した。

裁判も割合に早く進み明日位には判決が云ひ渡される様に思はれた。助作は今日こそはと思ひ例のやうに八坂の村口にさしかゝると、突然目の前に一人の比丘尼が現はれて

「助作よお前が行けば勝と信じてゐる裁判も今日は負けとなるから今日行く事は思ひ止つたがよからう」と云つた。

之を聞いた助作は

「何だ縁起の悪い事をいふ奴だ比丘尼の癖に生意氣だ」といふや否やいきなり腰の刀をぬいて此の尼僧を大袈裟にすんぽりと切り下した。そして血に染まつた比丘尼を振り向きもせず悠々と佐和山に歩を運んだ。

以外にも裁判は比丘尼の豫言のやうに助作の負けといふ判決が下された。之の悲痛な判決を聞いた助作は前の尼僧に合はす顔もなくその上無念遺瀨なく遂に切腹して武士特有の自分の正義を示した。

らない人もあるだらうが、かなり有名な地蔵様がある。

そして此の地蔵様には不思議な傳説がある。私の家が八坂の地に移轉してから略々十年位になる。そして此の由緒深い地蔵様の地蔵盆にも幾度か遇つた。その都度村人の中の物語り爺さんから色々聞いた傳説はかうなのである。

同じ江州愛知郡葉枝見村字本庄といふ村に、本庄助作といふ一人の武士が住んでゐた。丁度その頃は石田三成の全盛時代で佐和山の城は嚴然とあの山に落ちついてゐた。

此の助作といふ人の家には元來助作の母が嫁いで來る時に持つて來たと云はれるよしの生へた廣大な莊地があつた。が併し幾年かの後此のよしの莊地について一つの問題が起つた。

それは此の廣い莊地の所有權争であつた。といふと如何にも内訌の様に聞へるが、實は隣村の人と争ふ事になつたのである。勿論助作は自分の家の物だと信じてはゐたが隣村の人は之は自分の村の所有地だと云つてきかなかつた。

問題は段々と惡化して行くし助作とても之に對してはつきりと證據立てる事も出來ず勿論その時代は土地の管理も行き届いてゐなかつたので色々考へた揚句遂々裁判に訴へるこ

間もなく此の悲報は本庄村なる助作の宅にも告げられた。が此の報を知つた妻の悲しみ、それは豫想外の悲しみであつた。

彼女は一途に佐和山を恨み隣村の人々を恨み狂人のやうに怒り且つ悲しみ白装束に身を變へて自分の子供を道連れとしその問題のよしの淵に身を投じた。そして彼女はその淵の主になつたといふことである。

その後村人達は此の憐れな悲しむべき日を思ひ起しては毎年々々此の淵の邊りに御供を正月等にはしてゐたといふ事で明治の御維新迄はそのよしの原が未だ残つてゐたといふ事である。そして問題の比丘尼は地蔵の化身といふのである。私は此の話が事實かどうかは知らない。が八坂の地蔵様の身が肩の所から胸にかけて切られたのか割れたのか何れにしても割れてゐる事は事實だし又本庄助作親子の墓のある事も確かである。

その墓は現に本庄村の杉山といふ人の寺の墓地に東向きに随分古くなつて列んでゐる。

あごひも

浅島 希一

近頃僕はあごひもがその人の性格を表はすといふことに気がついた。何もあごひもに限らないのだけれど、何だかあごひもの弛緩といふことがより重大に思はれる。

心の緊張はその人の外面の表情に表はれるものであるが、此のあごひもこそ心の緊張を表はす最良のものであらうと思ふ。

心の緊張してゐる者のあごひもはやはりひきしまつてゐる。然らざるものはゆるんでゐる。

よくあごひもがだらりとたれてゐるのがある。心が緊張してゐない證據である。併し人は必ずしも何時も緊張してゐなければならぬといふことはない。充分に打ち寛いでゐてよい時もある。此の心の緊張してゐると否とを、はつきりと區別してゐる者こそ眞の緊張した心を持つてゐる者ではあるまいか。此の様なあごひもは何時もひきしまつてゐる。

て、喧しい蛙の鳴聲が聞えて來た。若しや雨では……と疑ひつゝ窓を押しあけて見れば、あゝ情けなや今日楽しく打ち眺めた櫻花も小夜嵐にさらはれて、脆くも散つて行くのである。あゝ憎らしき雨哉「さくと見しまに」と昔の人が詠みいと名残を惜しんだのも尤もなことである。

さてもさても、はかないのは此の世の習である。人生の櫻花によくにてゐることはどうであらう。昨日までは紳士とあがめられ、淑女と呼ばれて、榮華を極めた人も、今日は見ただに悲しい姿と變り、又は老少不定とて、明日は此の地を離れて、黄泉の客となつて行くのも知らずに、何とて櫻花のはかないのをのみ悲しむのだらうか。はかないのは皆同じである。が然し櫻花は再び咲く期日があるけれども、我等は再び來る時は無いのである。こう思へば我等は徒らに時を過す事は出来ないものである。寧ろ我等の一秒は我等の生命ともなるのである。それに今人は、自分の事は少しも思はず、たゞ遊びに耽るとは、何といふ情けないことだらう。

我等は、宜しく我身を修めて、時を失はず自分の爲すべき業に専心努力すべきが本意ではなからうか。

僕は少年俱樂部「鉛筆一本に宿る人間の運命」といふ後藤靜香氏の話を讀んで、成程と肯かせられた。然らば吾人のあごひもにも所謂人間の運命なるものが宿つてゐはしないか。僕にはどうもそう思はれる處がある。

吾人は須らく其のあごひもに注意すべきではあるまいか。各人の反省をうながす。

櫻花散るの感

黒田 英磨

あまり廣くもなく、又狭くもない僕の家の境内には、何時植ゑたのだらうか大分古びた櫻の木がある。時を遡へず今年も已に今を盛りと咲いた。その眺めは誠にたとへる物もなく見る者の心を奪ひ去りはしないかとまで疑はれる。ほんたうに、之が此の世の物だらうかとさへ思はれる。心地よい或春の一日親しい友達を集めて、飽くまでうち眺め或は賞しあつた。黄昏からしばらく書でも讀まうかと思つて電燈の下に書をひろげ、獨り茫然として居る折俄かにあはたしい音がし

彼等はいづこへ

むさくるしく積み上げられた荷物棚の下には、いろんな人が集まつてゐる。汽車の動くにつれて彼等も共に動いてゐる。楽しさである。彼等の顔を一々見ると面白いものだ。まるで展覽會か何かでも見てゐる様だ。一寸耳を働かせば、いろんな話も聞ければ、又いろんな事もうかゞはれる。「ねん、ねん、早く御ねんね」と子を抱いて獨り言の様に言つてゐる人。四角い様な丸い様な頭を、四方八方へ廻して、大きな目玉をぎよろ／＼動かす一寸氣味の悪い人、御酒の一升も飲んだ様な顔をしてだらしなく眠つてゐる人もあれば、汽車にまかせてと言つた風に、口笛を吹いて香氣にやつてゐる青年もある。種々様々だ、彼等は皆香氣さうだ。彼等は果して香氣なのだらうか、いや、決して、さうではない。就職難、不景氣と打ち續く苦しみに、彼等は決して遊んで生活して行ける身ではないのだ。彼等は狭い車中に一時の安樂を求めて居るのに違ひない。車中は彼等の休憩所だ。彼等は何處へか行くに違ひない。

彼等はいづこへ何を求めて行くのだらう。

或る日

松宮 實

炎熱焼くが如き或る日の午後、僕は家を飛出した。歩みつゝも汗はだく、シャツをじつとり潤ぼした。水は浴びたし……石地藏!!! ブクブク……なので残念ながら水泳だけは止しちやつた。程なく二三人の友達に出喰はしたので、皆んなと一緒に母校を訪問することにした。

一行は得意な先輩顔をしつつ、何時の間にか校門をくぐつて居た。

「校舎等仲々素敵になつたなあ——」

「立派な奉安庫も出来てるよ」

「そら、花園には綺麗な花が咲いてらあ——」

「俺等の若い時は……」

と年寄りくさい話をしながらグラウンドの方へと歩を進めた

「だが俺等の時代と比べれば實に雲泥の差があるなあ——」

成程我等の母校も見違へる程發展して來た。斯うした母校

併し面白い。だん／＼やる中に疲れて、ぐた／＼になつてしまつた。それに先生、猶ほ疲れた様子も見せずに依然手にラケットを握りしめて、神崎商業の選手相手にやつてゐられる。ボーン、ボーン!! と意氣軒昂の體だ。その元氣には僕等も舌を巻いた。

ふと西山に入りかゝる太陽に氣が附いた。をらが先生相變らず元氣潑潑たるものがある。と再び西空を見ると、もう偉大なる太陽の英姿は見えない。たゞ一面に紅色の雲が漂うてゐるばかりだ。赤蜻蛉が數匹スイ／＼と夕空に馳驅してゐる。やがて庭球を止して後始末をした。

それから小使室で冷水に咽喉をうるほしつつ、過ぎし日の樂しさを想出して、再び快活な小學生に蘇つた様な氣分を充分に味はつた。

午後七時!! 先生に別れを告げて我が家へと急いだ。

あゝ愉快だつた。實に痛快だつた。

に對する赤裸々な批判をしながら、樂しかつた僕等小學生時代の再來を祈つて見たが、そんな憲法はないのだから仕方がない。間もなくガラ／＼といふ扉を開ける音と共に顯はれた……こちらへやつてくる。「先生だッ」と。それは僕等の舊師だつた。一同顔を見合はして黙り込む。

だん／＼近くなつて、媚毛までがはつきりと見えるやうになつた。すると先生ニコ／＼のエビス顔をしながら

「やあ——!!! みんな遊びに來たのか？」

一つ何かして遊ばう」と昔ながらの音調で云はれた。

先生は庭球・野球に熱心なので「野球はどうです？」と僕が云ふと「駄目だ、これ見てくれ」と左手を差し出された。見ると食指に繻帶が巻いてある。

「つき指したんだ」と先生のうらめしさうな顔。

そこで庭球をすることにした。倉庫からネット、ラケット、ボール等を持ち出した。陽はかん／＼と照りつけてゐる。暫くはラケット手に、グラウンドの土とまみれて滅茶苦茶流の庭球をやつた。お蔭で汗は瀧の如しといふ風だ。ボーンと飛ばばボーンと還す。斯う云へば自分が何如にも上手かの様に思はれるが、實はみんなの中で最も……上手なんだ。

或夜の事

竹 下 茂

雨あがりの或日、私は學校から歸へつて遊んで居る間に、早初秋の日は暮れて、一面に薄黒い闇に鎖されてしまつたので、御飯を食べて小屋に行き遊んで居ると、時々大砲の音でもする様にドーンドーンと言ふのが聞えて來るのであつた。

私には此の何所からと無く流れて來る音が、不思議にさびしく聞えて、終に居ても立つても居られなくなつたので、一人で戸外に飛び出して雨上りの良く晴れ切つた空を唯茫然として仰いで居りました。併しまだ月はないが、満天寶石でもちりばめたやうに非常に心持ちの良い晩であつた。又ドーンとひびく音がする、私は何所かに花火でも上げて居るのでは無いかと思つた。

併しながら私は時々此の様な事を思ひ浮べた。私の村には大きな石灰岩質の山があつて、それをうがつては石灰として遠方に送つて居るのである。其所ではダイナマイトを用ひて

岩を爆發させるのである。そして其のダイナマイトは、我が字より山一つ越えた所に小さな蔵が二つあつて、其の蔵の周圍は小高い土手を作つて萬一の事をさける様にしてある。此又の山には岩を取崩す鮮人の土工たちも多く居て、何時此の岩と一緒に高い所から落ちて死ぬか分らぬ命を持つて、一日／＼と働いて居るのである。此の土工が親方に反感でも持つて、此の火藥に火でもつけ様と思ふ様な者が無いとも限らないと思つて居たが、此時も又私の胸には此のことが浮び上つて、幾度も此の様な事を考へた末、此あやしい爆音を何物であるか解決する爲、隣家の友の家へ行き友を呼び出して聞いて見れば、今日は醒井の祭りであつて、鎮守の森で音頭があり、人呼びに花火でも上げて居るのであらうと親切に話してくれたので、花火好の心から友を促して之を見に行く事にした。途中村外れまで來たら、つい前の山の上の方で音がしたかと思ふと、赤や青の色の見事な花火が初秋の雨上りの夜を一層すが／＼しくさせて、さつと消えて行く此の心持良さ、まるで山櫻の花が美しく咲き亂れて居る中を、春風がさあつと來ておしげもなくちら／＼散つて行く有様と同一である。そして私は思はず足を止めて此の美しい花火を家に残つて居る

弟に見せてやりたかつた。
そして私等は稻の穂が垂れた田の間の一すぢ途を話しながら行つたが、花火は上らない。唯眼前には、先の石灰岩質の山が掘られた所は夜のとばりの中に薄白く見え、又私が後を振歸つて見ると、水蒸氣の爲にぼうと煙つた山々を背景にして、我が字は夜の電燈の光によつて薄ぼんやりと煙つて、家などは一切見えない。そしてだん／＼と行き學校の所まで來ると、夜學の生徒が今晩は音頭があるので夜學が無いのだと言つて、五六人醒井の方へ行くので、其人等に追ひ着いて見れば、皆んな我が字の人々で、中には私と同年の友も交つてゐるので、一緒に連立ちて行くと、鎮守の森は長い石段に燈明がついてゐて、非常ににぎやかさうである。此の長い／＼石段をあへぎ／＼登りつめた所はかなり廣い境内があつて、其所には一杯の人々が居て、社務所の入口の所で音頭取つて居るのを聞いて居る。私は少し聞いて居たが友が歸へる事を促したので、すぐ二人で歸へつて行つた。

清水

島田 正男

夏休の或日の事である。僕は弟と村人につれられて深山（我村近き山名）に登山する事にした。其の日は朝から一片の雲も見えなかつた。僕は深山に登る事は初めてであるから、深山と云ふだけあつて村里を遠く離れた深山であると思つて居た。家を出る時父に水筒はと問へば、谷川の清水で結構だといはれた。なかなか生水を飲ませられぬ父のめづらしい言葉に、僕は餘程美しい水があるのかと思つて茶を持たないで出かけた。一里餘りも坂道を歩いて樂に入口まで來た。その邊にははや村里では見る事の出来ない程澄切つて居る谷川の流を見た。弟はすぐ茶の代りに水を飲んだ。是よりだん／＼進むにつれて深山氣分になつて來た。勿論人聲などは少しもせず、大變靜かであつた。すると向ふで／＼と云ふ大音響が聞えて來た。日はかん／＼とちようど僕等の頭の上で輝いて居る。この眞晝に何だらう。僕は怪しさに何となくおじけ

がついて來た。何でもと思つて百米ばかり行くと氣がついた。谷川の清水である。さう大した水ではないが多くの岩にあたつてものすごい音を立てゝ居たのであつた。邊にある一すぢの細道には草がおひ茂つて居た。後にわだかまつてゐる苔蒸した一大岩石は、丁度何か猛獸の住家の様に思はれた。又川の上下を観ると大蛇などの水飲場ではないかと思つた。併しこの水の美しさは恐らく何と云つてよいか分らなかつた。僕が此所で最も感じたことは、この眞夏のこの茂みの中でも蚊の居ないことであつた。一匹の蚊も見えなかつた。僕はこの谷川があまり清く美しいので、蚊も生れる事が出来ないのだと思つた。そこでこの清水が十分害のない事を知り、大變暑かつたので十分水を飲み、衣服をも洗つて汗を拭ひ体を洗つた。又此の氣持の良い所で辨當を食べる事にした。當然茶等は少しもいらなかつた。その上辨當が足らない程食べる事が出來た。
僕は元より靜かな田舎で生れながらも、此所になら毎日毎日薪取するとも生活したくなつたので、都會生れの人が此所を見ればどんなにかさわがしい都會を後に此所に住みたく思ふだらうと僕は思つた。

朋 友

名 畑 惣 次

世に朋友といふものがなかつたならばどんなに淋しい事だろう！若し人であつて喜憂を分つ朋友があるならば其の憂は半し喜は倍するだらう。それだから人は須らく友と交るのがよい。併し諺に「朱に交れば赤くなる」と云つてゐる様に朋友から受ける感化は甚だ大である。即ち悪友と交れば何時となく悪化せられるものである。それは丁度黴菌の様に暗黒面を経て傳染するものである。故に最良の法は悪友を避けて之に交ない事である。之に反して己よりも優つた者と交るときは知らず／＼の中に其の感化を受けて利益を得る事が甚だ多い。此の様な朋友を益友と云ふのである。既に益友を擇んだ上は信義を以て之と交らなくてはならない。信義とは互に信じ合ひ誠心を盡くして偽のないのをいふのである。さうであるから朋友の間は悪い事があれば忠告しあひ善いことがあるれば共に喜び互に親切でなくてはならない。又學課に於ても

さうである。けれども朋友に親切でなくてはならないといつても不正不義な事までしてこれを助けよと云ふのではない。それで朋友の交は飽くまで正義正道に依らなくてはならないのである。

家 相

竹 内 一

叔母は見舞に來たと稱して朝飯も、晝飯も、はては夕食までうちで食べて歸るつもりらしかつた。

「家相が悪いのや。きまつてる。家相を誰かに見てもらひなはれ」と言つて、父がまだ返事もしないのに、叔母は家相といふことのいかに重大なかを滔々とのべだした。

「どこやらの奥さんがいつも熱が出て動けんのや、醫者はなんとか言ふ病ぢやと言つたけれど、もしやそのうちの家相が悪いのやないやらかと思つて、私の村のなんとか言ふ人にみてもらうたら（家のどこやらに不淨があるさかい、そこを清め

て鹽をまいて踏まんやうにして、なほつたらお禮参りをせよ）と言つたのでさつそくさうしたら、その翌日から奥さんの熱が止まへんのやがな」叔母はさう一息に言つて、ごくりと唾をのみこんだ。

實際僕の家は病人が絶えない。父は足の靴ずれで學校を休んだのが五週間、まだ歩けない。母はいつも寝てゐるかおきてゐるかかわからない。寒稽古で盲腸炎をおこし、水泳で心臓瓣膜炎になつた僕。そんな状態だ。見舞に來た叔母が心配するの無理はない。

「うむ、わしもさう思つてゐる」と父がねながらまじめに答へた。しかしそんな事が信じられるだらうか？家のどこかに不淨が云々。あまりに眞面目にそのことを信じてゐる叔母がをかしくなつて、そつとつむいてあくびと笑ひとをかみころした。しかし叔母の態度は、家相の吉凶を唯一つの迷信として笑つてしまふには、あまりに眞剣であつた。情がこもつてゐた。

これが田舎の人の眞心ではないか！叔母の話の人もその迷信によつて病氣がなほつたではないか。さう思つて僕は叔母の顔と父の顔とをかはりにながめた。

「それから……」と伯母が言ひ出した。

「いやわしも二つ三つそんなことをきいた。この家は太陽の光線は十分に入る。近所とは相當の間隔をおいて接してゐる。ほりのすぐそばだから多少じめ／＼する。それだけの事だ」と父が言つた。

「家相が悪いのや」叔母がおつかぶせるやうに言つた。

それから話が進んで「わたしの村にゐる家相をよく見る人に言ふときませう。もしそこから家の様子等をきいてきたら知らしてやりなはれ」と言ふ所まで行つた。

×

話が終ると伯母は歸りかけた。夕飯はたべるつもりではなかつたらしい。

「まあよいがな」と僕はお定まりの文句を言ひながら外を見た。丁度二時半の眞夏の太陽が庭一ぱいを照して、外はまつたく明るかつた。「さやうなら」といつて伯母が日傘をさして歸つて行くのを見送つてから、僕は裏庭へ廻つて見た。そしてふとしやがんで縁の下をのぞいた。その中は本當に眞暗だつた。日が照れば照る程その下は黒いやうに思へた。

「こんなにも明るい家の内に暗い／＼こんな所もある」

と思ふと、何だか淋しく空恐しくなつて思はず「家相が悪いのかなあ」と呟いた。

旱 魃

音楽は疲れた人の心を慰めると言ふ。しかしすぎ腹で疲れ切つてゐる人にどれだけ太鼓をたゝいたり、ハーモニカを吹いて聞かしても、その人が満足する筈がない。この頃のやうに、ゴロ／＼と毎日雷がなつたりごくまれに光つたりするのでは、から／＼になつてゐるこの大地を潤すことが出来る筈はない。蟬の聲も妙にいぢけてゐる。旱魃につき区内歩行の際は喫煙御遠慮下さい」といふ告示の紙が何度もはられては子供の爲に破られた。

家の前に石屋がある。そこで一人の石工が毎日いろんなものをほつてゐるのが二階から見える。大分年よりらしく何度も休んでは煙草をのむ。

ちいさんこんどはなんですか。

びしやもんでんをきざむのだ。

いつごろまでに出来ますか。

かゝめ、扇子を右手にもつて歩き、道をまがる時彼は正しく直角にまがつた。まつすぐに行くのかと思ふ程、十字路の真中まで来てくると廻つた。誰にも害を加へず、時には——それはその村に角力があつて非常に混雑した時だつた——道の真中へたつて「左側通行。左へ！左へ！！」等といつてゐた様子は、むしろ發狂を装ふのではないかと思はれるのであつた。

彼は石屋の前まで来て何か言つた。もと石屋だつたのでこの石屋とも親しくしてゐたのかも知れぬ。がもう前の石工はひつこんでゐる。ひげをはやした狂人は「止れ」や「きをつけ」「三步前へ」を石屋の前で通行人や自動車にむけてくりかへし／＼となつてゐた。

來春まではかゝるだらう。
來春までもと驚けば

そんな歌も思ひ出したが、前の石屋はいつも墓石ばかりをほつてゐた。今日も日が家の向ふの銀杏の影になると、彼は石を往來へ出してほりだした。その石も墓石だつた。「昭和四年五月……」「法名……」彼は石を往來へ出してゐるので、通行の人々は邪魔になると思ひながら、誰もよけて通つた。彼は人が通ると眼鏡ごしにちらとながめた。彼はふと手を休めた。菓子屋の角から髭をはやして、和服に烏打帽をかむつた男がやつて來た。例の野球の審判のアウトのやうな恰好で……。

彼は發狂者なのだ。彼はもと石屋であつて、今は三人の子供もあるといふ。それに彼は毎日この村のあたりをうろつき廻つて、何かどなつてゐる。それがこゝへ來てから三週間にもならない僕がよく知つてゐるわけだ。しかし僕も彼の發狂の動機は知らない。恐らく彼自身以外の何人もそれを知ることとは出来ないだらう。

彼は「きをつけ」とか「止れ」「三步前へ」等と言つて腰を

發狂を装ふことさへ既に發狂だ。大勢の子供にとりまかれ笑はれながら、彼はやがて例の足どり手ぶりで菓子屋の角をまがつて行つた。彼はどんな半生を過して來たのだらうか。さうして彼はどんな一生をおくることか！

今は午後四時、村中はひつそりして石屋の鑿の音だけが小さく聞える。蟬の聲も朝からたて續けて、殆んど氣がつかない程單調だ。

大地は今眠つてゐる。そのねむりを覺まさうとするかのやうに、雷が時々思ひついてはゴロ／＼となる。



創作

團 戀木

飯 村 天 祐

蚊取線香の煙は横線を引いてゐた。隣家の庭で話し合ふ老人の聲は夕べの空氣に消えてゐた。明け放なされた庭は淡く光つてゐた。其處におかれた團扇の顔は笑つてゐた。姉さんにどこか似てゐると彼は思つた。そして新聞をひろげた。

「米原驛構内の火事」

父と兄とはビールを飲んでゐる。そして雜誌にふけつてゐる。新聞から腫をあげた彼は父に言つた。

「保三ツてけつたいな名をつけたもんだなあ——……」

彼は愉快だつた。何といふ事なしに愉快だつた。しやべつてしまつてからも一人で鼻歌を歌つた。兄が笑つた。父は赤い顔をにつこりさしてわさびづけをつまんだ。

「おいやれよ！」

兄にそう言つてビールをついでやつた。そして後に兩手をついて熱い息を吹いた。父は言つた。

「それはね。お前が地方長官等になつた時署名し易い様にやさしくていゝ字を擇んだのださ!!……」

「ハハハ……」

三つの笑ひが爆發した。兄の顔は紅かつた。三人の心は愉快でたまらなかつた。父は酒に弱くて少しやれば上氣嫌だ。兄もその通りだ。彼は父の言葉がたまらなく心地よかつた。歌でも大聲でうなりたくなつた。愉快だ。蚊が新聞の上に落ちた。指先で其奴をつぶした。

「金解禁機近づく」

母が蚊張をつる音がした。兄が葡萄をつまんだ。彼は大きなあくびをした。クス／＼兄が笑つた。そして大きく團扇を使つた。父も兄も彼の顔を見てゐた。

「寝やうか？」

三人は又故もなく笑つた。床をのべてしまつた母が來て一段と話して花が咲いて行くのだ。書き忘れてゐた。

姉さんはお風呂に行つてゐないから——……。

そうだ!! 今日姉さんのお嫁入りの定まつた楽しき佛滅の日だつたのだ。

「お前もやらぬか? 保!」

「よう飲まないよ!」

兄はコップを口にあてた。彼は葡萄をつまんだ。そして新聞の上に目を走らした。

「Z伯號到着」

今迄そこにゐて話してゐた母は寢間の方へ行つた。

「つぎましようか?」

兄が父に言つた。

「もういらぬ! お前やつてしまつてくれ!」

兄は自分のコップについだ。彼は新聞の活字を拾ひ續けた。

「今日午後三時半無事霞浦に着陸す」

父は又深い息をした。そして汗をぬぐつた。

「ツエツペリンは大きなものだなあ!」

兄が彼に話しかけた。

「うん! 直徑四十間やてね六十人から乗つてゐるんだから」

父は實に火をつけた。煙は兄がつかふ團扇にかき亂された。

煙をはき乍ら父は言つた。

「それはね」

兄も彼も何んだかしら? と思つて等しく父を見つめた。

三 吉

木 村 三 雄

春三月三吉は嬉しい様な悲しいやうな卒業式を終へると町の床屋へ小僧に出された。愈々出發するときお母が「体に氣をつけるよ」と涙聲で言ふと「大丈夫」と元氣にいつた。そして窓から首を出してなんだか大變みすばらしい母親が見えなくなるまで見ていた。汽車はみる／＼速くなつていつた。

窓から首をひつこめて如何にも幼い時のすべては終つてしまつたと言ふ様にどんとばねじかけの腰かけに腰をおろした安心と前途の希望に對する不安が彼の心をかけめぐつたが、人生と自己と言ふものに關して頭を悩ますにはあまりにも三吉は純情であつた。彼はほろ／＼と涙を流した。

はす向ひに居る若い婦人が白い齒なみ見せて笑つた。それは靜かな、そして彼の心情を充分くみとる事が出来る笑ひであつた。「くそ」と小さいこぶしでごし／＼とはうり落ちる涙をはらつた……。

一年。三吉はもうすっかり小僧でした。三月のある午後彼
はかみそりをとぎながら明日は卒業式だと言つて頭をかりに
來た男の子の元氣そうな顔を見るとふいつと悲しくなつた。

そしてぼんやり前方の空虚な壁をながめていた。恐らく母の
ことや弟の俊の事など思つていたに違ひない。追懷はそれか
らそれへと走つた。彼はもう一度でよいから故郷の山々で幼
な友達と遊んで見たいと思つた。たつた一度。

夜、まだうすら寒い街頭に電線がほえてはいるが歩く人々
にもどこことなくゆとりが見えて床屋の内は湯氣で常春である
客は一人もない。パチ／＼と炭火が靜かに燃えている。三吉
はさきほどから温かさでう／＼と眠つていた。親方はねむ
けをさましてやらうと「三吉お前は十五だつたかの」「うむ……
十……十……し……四だ」「は……あ年強か」「うむ強いのだ、お山
ぢや大將だ」ぐ／＼「他愛もないものだ」「おい寝かしてや
つてくれ」この小供なしの夫婦は三吉はまるで我が子の様に
可愛いがつた。

あけの朝三吉はやはらかい蒲團の中で目をさますともう日
は高く揚つて居る。鐵びんが「ちん／＼」湯氣をふいて居る。
かつと明るい障子に梅のかけがさして「ホーホケキヨ」と初

しかし彼の純潔な心に雨前の雲の様なうす黒い疑惑の魔神
が忍びこむ時がきました。

むし暑い七月の始、鏡のある間に晝寢していた彼三吉が三
時頃ふつと眼をさますと、おぼろな映像がその鏡に影を宿し
ていたのです。

三吉はぼんやりした頭とまなざしでしばらく凝視している
とびつくりして飛起きた。凝視がなほつゞく。

三吉の頭は狂亂した。「自分………自己………私………」なが
めているうちに自己と自己の姿がはつきりと二つになつた。
「これが自分だらう？」姿でない。物体ではないのである。

これが昨日まで他人の頭をかつていた自分？ まるで他人
の顔に見えるのです。「まあ何をしているの」「ふりむかないま
す／＼頭をくつつけている。「いやぢやないの」「彼は泣きたく
なつた。やつとおかみさんに引離されて我にかへつた。

其の夜三吉は考へました。自分と言ふものがはつきりして
くると必然的に死の觀念がおどしかける。前がわからぬそう
するともうそこで頭が混亂してしまいました。

毎晩彼は考へた。親方は不景氣風に見舞れながらも樂天家
で酒をのんだ。のんで歌つた。三吉はもう此頃ではすっかり

鶯が枝にとまつてほがらかに陰さんな冬がもうすっかり去つ
たと告げる。尾がびち／＼と元氣よく障子にうつる。「あ——
あ」と大きな欠伸を一つした。

「三吉やもう起なさいよ」「お早やうございます」「十時です
よ」「彼はいつになく元氣よくとび起きた。井戸端へ出るとも
うすみ切つた水が待つていた。しみじみと若緑の中からほが
らかな幸福が太陽の熱の様にぽか／＼出てくるのではないか
と思はれた。小僧としてこんな幸福があるだらうかと思つた。
チャキ／＼手錶の音が氣持よくひびく。

こんな時彼の頭は幸福と言ふ一塊を除いては全く空虚なも
のでした。つまり世の中で彼の親方の様に、或ひは家庭に於
ける多事多端なおかみさんの様にもしくは彼の様に仕事をす
る、働くと言ふその事自身が人生であつて、生きて行くと言
ふ爲に仕事即社會の一部の仕事を自然に分擔しているんだと
言ふ事にはほとんど無關心なのです。こんな人はかへつて樂
に世の中を渡つて行く。

二年。三年。彼の幸福は依然として變らなかつた。強いて
求めたなれば彼が前よりは二人の愛に對して常に感謝する様
になつた事である。

だまりこくつていた。「三吉お前も歌へよ。」彼は歌つてやら
うと思つた。そこへ三吉の遊び友達の萬公が來た。彼は文學
家きどりである。三吉はきれいな聲で

お月さま圓いな

と小學校の童謡を歌ひ出したがふと途中で調子をかへてしま
つた。

なぜ圓い。

おいらが知るもんか。

死んでやらうか。

勝手にしろ。

いやだ。

「おい、お。何をいつてるんだ」「三吉は一寸此頃變ですな
！」萬公「いかなお月さまは圓いんだなぜかと問ふ奴があ
るか。問ふ所にはすでに小年の純情の閃めきが消えて冷たい
理智のひらめきがあり／＼と見えて嫌だ」と批評した。三吉
は向きになつて怒つてやらうと思つたがやめた。

三吉は親方に「人間つて何だらう」と問ひかけた時もあつ
た。親方は「人間は金と位のすきな奴よ」と教へてくれた。
満足できない。大工の萬公に聞いて見た。「人間とはだ……」

えい、つと、やはり人間だね」とごまかした。三吉は増々憂鬱になつた。

彼はいつか萬公に彼の家の事情を話された事がありました。父親が十年程前に死んでおいらは其の時笑つていたとも言ひました。色々苦しいのだがおいらは物を善意に解釋しているから苦にならぬとも言ひました。

彼は人生を善意に考へるも驚もないものだと思つた。

休日彼と萬公は小使錢を貰つて野球見物に出かけました。

おい三吉君おれの新体詩を聞かせてやらうか。「あゝ」こはいゆうのだ。

冬がれの野に立ちて

思はずともなげに

野菊の一輪を見ていたら

急に悲しくなつた

でも、この野にも

春への営みの力は絶えず働いて

やがて春の女神がはるくくと

山を越え 野を過ぎ 丘を越え

この若草にほゝあみかけたら

彼等はきつと笑を爆發さすだらう

爆發の洪水だ

急にうれしくなつちやつた。

てえんだ。「どうだ」「面白いね。」

野球は大熱戦で○中學の勝利に歸した。奏樂につれて萬公はおどり出して手のまひ足のふむ所を知らないと言つた調子三吉も一寸嬉しくなつたが「あの選手だつて死ぬだ」ね、萬吉君。「ば、馬鹿な事を言ふなおい」三吉は萬公が懷から出してのお守を見て「おい落ちるよ」と注意してやると萬公は「あつ」と氣がついて急にいていねいにたゝんで懷に入れた。そしてぽつりとだまつてしまつた。「どうした」「なになんでもないんだが」一寸お母の事を思ひだしてね」と涙を出した。

三吉は急に爆發する様に笑ひ出した。彼は愉快になつた。

「おい、萬吉君お互に働いて親に安心させようぜ」「うむ」

三吉、彼はやはり小年だつたのです。

うそだと思ふならあのY町の床屋へ行つてごらんさい。

どんなにか三吉ははればれとして兩頬を眞赤にそめて働いているのか！



詩 藻

晚秋偶成

大和田清朗

昨暑今涼頃刻流
讀書窓外亂蛩稠
山穰木落何荒漠
國弊人饑豈獻酬
聖上憐民無暇睡
相公憂世奈難休
隣邦況又無仁義
誰策東洋第一籌
賤ヶ嶽懷古
立蕃驕勝未回駘

新春偶成

拂曉金瓢在嶽南
千歲誰知連壘跡
一輪孤月照寒潭
六花滿地着羊裘
一望皚々映旭旒
過戶賀賓多顯世
同鄉勿頸半冥幽
仰見雪裏梅蕾發
徒歎鏡中霜髯稠
野老元來名利拙
團樂繞卓運觥籌

秋 二 題

飯村 天祐

すばらしい光の中で

私は

風景と諧の

甚だしい遠近法の懸隔を——否!!! 全然異なつた錯誤を感じながらも

せつせと筆を運ばせて行くのだ!

白色と白色の交錯の中に

店先では

梨や林檎が

みづ／＼しく並んでゐる

秋の横顔だ!

卒業の歌

さあ——

——旅出だ!

——出發だ!!

(今日孤りで食ふ林檎の

おゝ何んとすつばい味覺よ

——お別れだ!

だが泣かないぞ!!)

友よ 行かう!

ハンマーが光つてゐる!

化学室にて

——ロマンスが生れる様な氣がした

ふくらんだ秋の天空をうたつた小鳥の小枝がふら／＼

と風にゆれるて——

私は心よい風景と甘い感覺に腫をつむる

——ッ?!!

化学教室は鈔角にうなつて爆音を孕むと

散り盡してしまつたのだ。

×

本に挟んだ黄色な一葉……

銀杏樹よ!!

永久にあれ!!

さらば!!

川

川はさら／＼と

森羅万象を映じて流れて行く。

それは

音もない 靜かな

彼等の動搖だ。

そこには

慈母の様な

優しさ と

平和のみが動いてゐる

不平もない。

反抗もない。

——私の感情は飛び出した 小鳥と共に——

$\text{CH}_4 + 2\text{O}_2 = \text{CO}_2 + 2\text{H}_2\text{O}$

「メタンと空氣との混合物に點火すると

爆發する」

銀杏樹

川 澄 健 一

銀杏樹の黄葉が散る様になれば

もう直ぐ卒業しなければならぬね。

かういつて、友と

毎時間毎時間

校庭を歩いてゐたのに……

×

黄葉はいつしか黄色を増し切つて

今や 野分は

男性的に、悉く

只従順そのものだ。

別離

山本喜平

隙ゆく駒の足はやみ
流れも速き芹川の
岸の邊の學び舎に
聞きつゝまどふせゝらぎや
夕べに響く城山の
鐘の音深く身にしみて
伊吹の靈峰ふしあふぎ
輝く琵琶の湖の
清き心をたゞへつゝ
學びきたりて五星霜

×

大正十四の春四月
始めて入りし學び舎よ

胸に溢るゝ喜びの

希望に燃ゆる雙の目の

幼き頃のなつかしや

額に輝く一中の

徽章や胸の金釦

春は酣櫻花

漂ふ花の香に酔ひて

囀る春の讚美歌の

雲のかたの雲雀にも

いとゞ樂しさまさり來て

若き血潮はおどりなん

吾ぞ天下の中學生

揚々濶歩の其の姿

心の中ぞなつかしや

げに人生の春なりき

尾上の櫻散り初めて

松の梢にかゝるとき

堀の水面に浮ぶとき

樂しき春の夢さめて

世は凋落の秋の日や

風は靜かに空すみて

秋は樂しき夕まぐれ

尾花に浮ぶ銀の月

いつまで若き人の身の

樂しき夢の我等ぞや

野分の風の吹きすさび

年は移りて星かはる

疊の光 窓の雪

文讀む月日重ね來て

重ねて今や別れ逝く

すぎにし夢をたどる時

あはれは深し桐の葉の

如何に寂しき想ひをか

流るゝ水に極むらん

×

朝日に映ゆる金龜城

幾度雄姿を慕ひしか

鐘の音如何に響きしか

ありし昔の露消えて

殘壘破壁しのび泣く

松の縁に我が心

迷へどいかで留むらん

いざや去りなん城山よ

變らぬ光永劫に

天に聳ゆる大銀杏

周章として逝く秋に

まき散らすなる黄金は

いかに吾等を慰めし

名残りにはあはれ一葉の

しをりに留めてさらばいざ

安きねむりに生きよかし

年の五つとせはぐゝみし

學びの校舎よなつかしき

生者必滅會者定離

理こそは知りをれど

彫れるク彦中々の落書に

思ひは千々にかき亂れ

かなしき別離に忍び泣く
去り逝かん身のはかなさよ
あゝ出で逝かん雄々しくも
熱き涙を打ちはらひ

(さらばよ　さらば　學び舎よ
健在なれや弟等よ)

さらば　師の君御教へを
胸に抱きて我は逝く
いでや去らなん永久に
喘へぎあへぎて叫ぶ目に
映つる金龜の城山は
涙に曇りて見えにけるかな。

凝　視

組　田　重　嘉

私は倦かすに一點を凝視する
全神經を力まかせに一點に注ぐ……。

たゞ——その虚ろさを求めたい許りに
黄色く萎え凋んだ神經を
無理にかきたてて
苦しい——凝視を續けるのだ
しばしの幸を求めて
このなぐさみをなすのだ。

動

あの清い流れの堤を通るとき
私は何時もザクロの葉を取つて草笛を鳴らした。
今も私はその枝に手を伸ばした
……が愕然として手の震へるのを感じた
薄緑の柔かい觸覺が私の唇で震動して
なだらかなメロデイーの漂ふこの葉だのに
……それは……眞黄になつてゐた！
呆然と見上げる黄色い葉蔭に
眞黒に朽ち果てたザクロの實が垂れてゐた
あゝ春の歌は朽ち果ててしまつた
春の讚美は老ひばれてしまつた

……やがて私の視覺は疲れ切つて
その色も形も分らなくなり
たゞ輪廓のみがボンヤリ瞳にうつる
あらゆる神經が麻痺して
自分の意識は遠くなつてゆき

(私——)と云ふ感覺も

胸にこみ上げてゐた煩はしい想も
大きくゆらいでフツト消えるローソクのように
みんな眞暗な無意識な空間になつてしまふ
靈魂が体をはなれて……

この身は骸に——暖かき屍になつてゆくのだ。

私は物を深く觀察したいのではない
惱ましい自分といふものを忘れ
幻や空想の様な漠然としたものをすらも忘れたいのだ
醜い現實生活の悩みが忘れたいのだ
自分の面影をじつとみつめる時に
私は戦慄しなければならぬ
私はそれが恐ろしいのだ！

紅薔薇は園の垣根に凋れた
太陽は春と同じ様に暖い
だが春はもう逝つてしまつたのだ——。
潮の様に押し寄せる秋の佗びしさ……。
地には凋落の秋が訪れた
そしてこの身には卒業が……。
過ぎし日の草笛の印象が身に迫る
もう一度枝を仰いだ……
……が黄色の憂が忍び寄るのみであつた。

朝の目覺め

横　田　廉　一

靜かに覺めた日曜の
朝の氣持は心地よい
烈しい雨風夜のうちに
さつぱり變つて上天氣
障子通して日の光

眠てゐる顔を照します
楽しいかあいゝ鳥の聲
お庭の木々から聞えます
さあ元氣よくおきいでて
仲よく一緒にうたひませう。

自然の美

室谷 秀次

自然の美の麗はしさよ！
されど文明は自然を飾らうと努力してゐる。
自然の美は人爲の美以上の麗はしさを示す。
我等のまはりには美によつてかこまれて居る。
月光皎々と照り星輝く夜の美しさよ！
すべて暗の中を月の色に美化される自然の
景色は自然によつて美化され麗はしく飾られる。
嚴島を飾る紅葉谷の木々よ！

長蛇の如く横たはる天橋の松の木々よ
満山白く美化する吉野の櫻よ！
老いたるも若きも我を忘れて
自然の麗さに酔はされて居るでは無いか
科學の發達とともに美化される自然の美
今こゝに接してはるかに想像以上なるを知る。

大地も搖ぐ如く響く阿蘇の噴火よ
一瞬にして山を造る砂漠の風よ！
取る手も休め眺め入るあの北極の極光よ
空の一角に浮び出る蜃氣樓の神秘よ皆自然の美だ。
遠い南の國の水の清澄の底に見ゆる珊瑚の群
海底に沈みし船の遺骸の上に右往左往する魚の群
すべては美であり神秘であり驚嘆である。

自然の美の麗しさよ！
されど文明は自然を飾らうと努力して居る
自然の美は人爲以上の麗しさを示す。
自然の美よ。汝の力の偉大なるものよ！

それでも何だか
物足りない様な氣がする。
やつぱりわたしは淋しい心の持主
もう一度生ける父に會ひたい氣がする
思へば尙わたしの心はふさがつて行く。

神經衰弱

眞野 淑順

わたしはさびしい心の持主
晩秋の野中に只一人
しよんぼりと小川ばかりを
見つめてる野菊の様に
わたしの心は淋しい
只一人雲の走るのを見つめてゐると
何だか悲しくなり心細くなり
しまひには涙が出て来る
こんな時は泣いて――
思ひきり泣いてその後は
すつとした氣持になるが

球兒の聲

那須 凌岳

凝視——注目——
堅い／＼石の様なしかも小さい球に向つて人々は眼も
心までもすいとられてゐる。
きけ！鐵棍のひびきを熱球のうなりを――
憂！白線を書いて研えた球が飛ぶ
やきつく様な大地の上で戦塵はあがる
投る——打つ——捕る——ころぶ——
熱し切つた選手等は眼中唯一個の光れる球のみ目あて

に我を忘れて馳驅する。

選手も審判もおゝ観衆までが

その男性的悲壯美に陶醉してゐる。

夏――

何物をも焼きつくさずでは置かないと言ふ様な夏である
炎々と上る熱氣の中である

「カーン!!!」

「ウオー」

「ヒットだ……」

「ファインプレーだ」「ウオー……!!!!」

彼方の山そして近所の家々に反響せる喊聲と動搖

一球一打! 居る人の忘我境の中に試合は進む

相手は京都師範!

「二對二」「四對二」「七對二」おゝ壓迫

味方は受味の形!

「五回表!」

「ゲームセット……」

「八對二」「惨敗」……

あゝ、あゝ負けた。負けたのだ。

落人の群の如く京津道指して歸りゆく敗者の悲哀

首はうなだれ汗と埃りと涙のかたまりより以外に何も

ない

灰色のいや真黒の感情の交錯を抑へて電車にゆられる

すべてが憂鬱な陰影をもつてゐるやうだ。

光輝ある歴史は血まみれだ

涙にぬれた顔々々

過ぎゆくすべてが過ぎゆく

絶望と哀愁の響を立てて

懐舊と追憶の中に

優勝した事もあつた。

大敗した事もあつた。

さては自分の未來……一時に胸はえぐりかへされる

雷が鳴るいなびかりがするあたりは薄暗くなる雨だ!

とうとうコールドゲームか……?

雄圖を挫く雨!

輓歌にも似た雨!

あゝ最後か? 終りか?

華やかな美しい夢は破れかゝつてゐる

限らない寂寥が心を掩ふ。

死滅? 生還?

何くそつ! 雨は晴れる 晴れるのだからと晴れて呉れ

るのだ

そして天は我々のために幸してくれるのだ。

「プレーボール……」

おゝ再びの試合

投げた。そして打つた。

然し――然し――

この雨は敵將に体を休ませたものゝ如く……

哀愁の情! 妙に錯綜した胸は容易に元にもどらない。

樂しかりし合宿の宵々よ。

疲れを忘れて蚊帳の中で心許せる球友とのねもの語り

ねられぬまゝに外に出た時などは

華やかな幻影を畫いて美しい詩の都彦根の夜をながめ

た

樂しく集ひし球友達の茶話會!

はてはあの練習の時が浮ぶ!

「モウ一ツ」と力強いコーチヤーのノック

「ヨシコイ」と云ひつゝよろ／＼としてあやふく一壘

に投ぜんとする疲れ切つた野手の氣の毒な送球!

「アウトコーナー」「インコーナー」「カーブ」「ドロツ

プ」「ウエスト」……と

キャツチャの言葉に「よし」と返事しても思ひ通り

ゆかない時には

涙してまで投げ續けたあの當時――

「レフト、今度はむつかしいぞツ」

「カーン」